



パンドラ効果 *The Pandora Effect* (1969) ジャック・ウィリアムスン (関口幸男・斎藤伯好訳) 早川書房 (文庫) (3/31刊・¥380)

一番古いもので一九二八年、新しいもので一九五四年の、初期短篇七作が収録されている。三十と五十年前の作品が中心で、いわゆる五〇年代SFと較べても、二昔前のものになる。

表題にある「パンドラ効果」とは、ギリシャ神話のパンドラのエピソードによる。一人の人間の不注意が、その人間のみならず、全人類までを不幸に追い込んでしまう——まあ、そんなバカンスの作品群という意味である。中篇「組合わされた手」は、ロボット物の古典「ヒューマノイド」(現在、翻訳は絶版)の原型である。完全無欠なロボット(ヒューマノイドと呼ばれる)たちにより、支配され、偽りのユートピアに囚われていく人間たち……。

五〇年代に先立つ四〇年代SFには、ヴォクトに代表される冒険SFの影が濃く、短篇も、まだそれほど洗練されていない。何しろ、文学的質の高い雑誌である『F&SF』や、『ギャラクシー』の創刊は、四〇年代終りのことなのだ。本書の場合、そういった洗練される以前というイメージがついて回る。それほど悪くはないのに、食い足りないのだ。(俊)